

辛亥革命・留学生派遣記念碑

奥井 勝二

千葉医科大学初代学長の三輪徳寛先生は長期間外科教授として、多くの業績を挙げられた。本稿に於いては明治44年（1911年）中国の辛亥革命時、中国留学生の「母国に帰り救急医療を行いたい」という強い希望を入れ、戦時医療、救急医学等の講義を行なったことに対し感謝して記念碑を建立した経緯をたどりたい。現在千葉大学医学部本館前の庭園に文字は読み取り難い記念碑がある。この記念碑は永いこと旧病院の第二外科医局の脇道沿いの木立の中に立っていたが20年位前に現在地に移されたものである。

明治44年は辛亥に当たり、その頃中国人民は清朝に対する反感が高まりこの王朝を打倒し、新しい中国を再興し発展させようとする革命運動が起り、その中枢的指導者が孫文であり、清王朝が倒れたのが辛亥革命である。その当時千葉医学専門学校はじめ全国の医学校に多くの中国からの留学生が多数おり、母国に帰り医療行動をしたいという希望が高まり学生運動が起った。千葉医学専門学校は荻生録造校長であり、外科の三輪徳寛教授、筒井八百珠教授、内科の井上善次郎教授等が中心となり救急医学、戦時医学の教育、母国に持参する医療器具、薬

辛亥革命・留学生派遣記念碑



品等の調達にも努力した。さらに外科教室の鈴木寿賀治医師（明治36年卒）を指導教官として同行させた。革命終了後全員復学し卒業した。彼等の感謝の気持で記念碑建立となった。（記念碑並びに碑文は写真参照）

元千葉県立衛生短期大学学長の澤田勤也先生（昭和28年卒）はこの記念碑の意義を尊重し、中国の研修医に頼み刻文を写し翻訳して貰った文章を紹介する。

辛亥の秋、中華民国に革命発生し、武漢で南北軍戦争が激化、留学生は医、薬で赤十字隊を編成し、救国に参ずるべく帰国す。その時、本校校長、先生、学生たちは救護法を誠心指導してくださり、薬品を頂き帰国し、湘南、武漢、安徽に赴いて傷兵を救護し、6カ月後無事帰校することができた。諸先生、諸学友の誠意に感謝し、記念碑を建立した。その碑にいわく、「清朝皇帝が退位し、共和政治が建てられ中華民国となったが、戦争は絶えず、屍は川を塞ぎ、山野は血ぬられている。人民の悲しみは誰が護ってくれるであろうか。三軍を励ますのは赤十字の旗、危機を救う。先生、学生たちは極めて公平に平和を願っている。仁寿を致し、人道を広め、徳意が世の中に盛んである。樹を植え、碑を建て万年永くたたえる。」

碑 文		紀 念
中 華 民 国 留 学 千 葉 医 学 専 門 学 校 学 生 同 建	生 死 肉 骨	愛 種 樹 之 碑 以 為 紀 念 其 辭 曰
	碧 血 青 野	王 綱 解 紐
	人 道 張 皇	救 傷 看 護 法 悉 心 指 導 各 学 友 復 讐 購 藥 為 贈 強 鼓 毀 毀 益 資
	德 意 濟 沛	策 勵 同 人 返 國 分 駐 於 湘 漢 江 淮 間 傷 兵 頗 利 賴 之 六 箇 月 戰 局
	木 石 萬 年	告 終 藏 事 返 校 雖 無 善 可 紀 而 列 先 生 及 諸 学 友 盛 意 弗 可 泯 也
	永 垂 勿 替	維 列 先 生
		亦 越 諸 友
		紅 十 字 旗
		伏 屍 塞 川
		兵 戒 敦 見
		國 步 艱 難
		誰 大 護 者
		共 和 初 建
		哀 此 生 民
		極 難 扶 危
		辛 亥 秋 中 華 民 国 革 命 事 起 武 漢 南 北 軍 戰 争 甚 烈 同 学 恐 戰 禍 蔓 延 而 傷 亡 之 數 多 也 乃 集 同 志 起 紅 十 字 隊 運 送 傷 兵 醫 藥 於 救 傷 看 護 法 悉 心 指 導 各 学 友 復 讐 購 藥 為 贈 強 鼓 毀 毀 益 資
		策 勵 同 人 返 國 分 駐 於 湘 漢 江 淮 間 傷 兵 頗 利 賴 之 六 箇 月 戰 局
		告 終 藏 事 返 校 雖 無 善 可 紀 而 列 先 生 及 諸 学 友 盛 意 弗 可 泯 也
		愛 種 樹 之 碑 以 為 紀 念 其 辭 曰
		王 綱 解 紐
		碧 血 青 野
		生 死 肉 骨

注：456頁 補注参照

以上の様な経過で記念碑はたてられた。三輪徳寛先生はじめ多くの先人達の留学生を思う気持の表れである。これらの事柄は日中友好の礎となればと思う処である。

引用文献：千葉大学医学部八十五年史、千葉大学医学部百周年記念誌

小島淑男：留日学生の辛亥革命

澤田勤也：いずみ 1998, NOV.

（おくい かつじ）